

『桶物語』における風刺：その難解さとスウィフトの意図

山内, 暁彦
九州大学大学院文学研究科：博士課程

<https://doi.org/10.15017/6786950>

出版情報：九大英文学．32, pp.21-37, 1989-11-20．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：



『桶物語』における風刺

—その難解さとスウィフトの意図—

山 内 暁 彦

序

ジョナサン・スウィフト Jonathan Swift の代表的な風刺作品の一つ『桶物語』*A Tale of a Tub* (1704)¹⁾は、彼の作品中において特異な位置を占める。Dr. Johnson は *Lives of the Poets* の中で、“It has so much more thinking, more knowledge, more power, more colour, than any of the works which are indubitably his.”²⁾と述べているが、こうした特色は表面上の難解さにつながっている。例えば後年の大作『ガリヴァ旅行記』*Gulliver's Travels* (1726) との比較においてこの作品がより難解であることに異論はないであろう。その難解さの要因を挙げるとすれば、その第一は構成上の複雑さである。奇妙な内容が複雑なレトリックを駆使して展開され、アイロニーに満ちた議論が中心となる「脱線」Digression の部分が、一応この作品の本筋と考えられる、キリスト教をアレゴリーの手法によって風刺した「桶物語」*A Tale of a Tub* の部分の間に挿入されているだけでなく、序文、献辞、結語等がその前後に加えられてもおり、全体としてみると非常に錯綜した形式と内容を備えているということが一読して分かる。第二に、この書物の書き手として設定された人物、つまりスウィフトのペルソナ persona となる人物の特徴が難解さの要因である。彼は一見すさまじい博覧強記の、高度に知的且つ理性的な人間として、様々なレトリックを駆使し論を進めているかのように見え、そのテキストは “dense and capricious, full of unsignalled references, hints, and obliquities” である。³⁾ だが仔細に検討してみると彼の論述は読者を欺き惑わす詭弁の連続であるといっても過言ではない。第1章「序論」Introduction で

ほのめかされているように、彼はグラブ街の文士のひとりであって、彼の書いたものであるという設定の本書は、一貫した関連性をその中に見出だそうとする読み方を拒むような、支離滅裂な様式と内容を最大の特質として持っているときえ思われる。この小論では、若かりし頃のスウィフトの野心的な風刺作品の持つ難解さの要因を作品の構成と書き手の面から、またその理由を風刺家スウィフトの意図の面から考察し、作品の持つ独自の特質を明らかにしたい。

I

『桶物語』の中心テーマを考える上での示唆は、スウィフトによって1710年の第5版に付された「弁明」An Apology から得ることが出来る。この書物の書き手‘author’に関しては次のように述べられている。

The Author was then young, his Invention at the Hight, and his Reading fresh in his Head. . . . Thus prepared, he thought the numerous and gross Corruptions in Religion and Learning might furnish Matter for a Satyr, that would be useful and diverting. (4)

‘useful and diverting’という字句に関しては後に検討することとして、ここでは風刺の題材に注目したい。上に挙げられた、宗教及び学問に関する風刺がそれぞれ「桶物語」の部と「脱線」の部で実行されていると考えられる。実際にはこの2つのモチーフは互いに無関係に並列されている訳ではない。例えば第9章の「社会における狂気の起源と効用と利用についての脱線」A Digression on Madness は、前後の第8章や第11章での主題である風神派Aeoristsの風刺と密接に関わりを持っている。即ち、「狂気」という概念を媒介として、これらの章は結び合わされていると見る事が出来るのである。

国教会を寓意する人物であるMartinのように首尾よく上着を元の状態に戻すことが出来なかったため、「癪癪と憎悪と焦燥のために気が狂うより他に

なかった」Jack が起こしたのが風神派である(第6章)。この架空の宗派に託して非国教徒、特に清教徒の「狂信」が寓されているのである。第8章でこの宗派の紹介がなされるが、原註によれば風神派とは “*All Pretenders to Inspiration whatsoever*” (150) である。彼らによれば「万物の起源は風」であり、風こそは “*Anima Mundi*” 即ち「世界の世界、息、風」the *Spirit, or Breath, or Wind of the World* なのである。本章の冒頭部分の論旨は、ルクレティウスからの引用 “*Quod procul à nobis flectat Fortuna gubernans*”⁴ や “*forma informans*”、“*anima mundi*” 等といった中世神秘主義思想をおもわす字句によって粉飾されており、一読して難解且つ深遠な印象を与えるべく書かれているが、その実は‘Spirit’という語に「風」と「精神」の両義があるということを利用して捏造されたものであるにすぎない。

本来「魂」と言うべきものを物理的な「風」に置き換えた結果生ずる奇想は absurd の域にまで達している。物語の書き手によって続いて紹介されるのは嘔気 Belching にまつわる秘儀である。“[A]ll their *Belches* were received for Sacred, the Sourer the better, and swallowed with infinite Consolation by their meager Devotees.” (154) 風神派の人々が滑稽な、と言うよりはむしろ異様な姿で描かれている。樽の中に入った司祭が泡を吹きながら弟子たちに嘔気を伝え、彼らはその霊気を飲み、歌い、体を揺するという描写は、もはや単に非国教徒の或る宗派の特徴を風刺しているにとどまらない。風神派がそれ自体新たに創作された新宗教であるかのように受け取れるものであり、この意味において、スウィフトの風刺の対象は、他者から見て「狂信」以外の何物でもないと思われる宗教の在り方一般にまで拡大されていると考えることもできる。いずれにせよ、この章で扱われたテーマは、本来神聖視されるべき宗教に関して、その内容と扱い方の双方に見られる「狂気」の要素である。つまり、風神派のみならず、この章を書いている人物もまた狂気に近いところに居る者であるということである。

さて、次の第9章「狂気についての脱線」は質的にも量的にも『桶物語』の中で特に重要な意味を持つ特異な章であり、ここにはスウィフトの風刺の技法が最も特徴的に展開されている。例えば Quintana はこの章を、“The satire is here raised to a degree of sheer brilliance certainly unequalled by even

the greatest of Swift's later compositions, and possibly by any other work of satire.”と高く評価している。⁵ここでは、「知能の転倒を来し頭脳がその本来の場所からゆらぎ出ている人物」即ち「狂気または錯乱」Madness or Phrenzy の名で呼ばれている人物の行為として次の三つが挙げられている。それは征服による新帝国の建設・哲学上の新学説の展開と発展・新宗教の案出と伝播である。第一のものについては、某大王と某国王の二例が、ちょうど章中の一挿話の形で述べられている。下等能力より昇る蒸気の働きがいかに彼らの頭脳を狂わせたかという、これだけを別個に論じて興味深い、奇妙な学説である「蒸気現象説」が述べられているが、この作品全体に対して持つ意味において、この第一の事項は後二者の哲学と宗教に及ばない。ここでの哲学とは学問一般というほどの意味であるから、本作品の、主として「脱線」の部分での風刺の対象となっている、学者、批評家、近代派の知識人たちを包含するものである。作者によって実例として挙げられている、エピキュロス、ディオゲネス、アポロニウス、ルクレティウス、パラケルスス、デカルトらは、現代の我々から見ればそれぞれ偉大な思想家であり哲学者であるが、ここでの取り扱われ方は必ずしもそうではない点が興味深い。この作品中しばしば言及され揶揄嘲笑の的となっている、スウィフトと同時代のウォットン Wotton、ベントレー Bentley など、近代人が古代人に勝ることを主張した一群の人々と同類に見倣される「近代人」デカルトと並んで、「古代人」の一人であるエピキュロスが挙げられていることも、新旧論争そのものの愚劣さを看取したスウィフトらしい手際のひとつである。

書き手の論は、このような哲学者たちが帰依者の群れを持つ理由を述べた後、ウォットンに対する個人風刺へと進む。彼の致命的過誤は、新宗教の普及のために用いられるべき本来の才能が、空疎な哲学に誤用せられたことであると彼は言い、大げさに嘆きの声をあげる。

Oh, had those happy Talents misapplied to vain Philosophy,
been turned into their proper Channels of *Dreams* and *Visions*,
where *Distortion* of Mind and Countenance, are of such Sovereign Use. (169)

この言葉は極めてアイロニカルな意味合いを持っている。「精神と顔貌の歪み」が役に立つ宗教とはいかなるものかは本書の読者には容易に想像されるものである。ここでは作者スウィフトがウォットンを、学問と宗教の両者に関する風刺をつなぐ材料として用いているのである。第三の項目である新宗教の案出と伝播はこの章では特に扱われていないが、その理由は単純である。Jack が風神派を起したことは既に第6章「桶物語」の末尾で述べられていたが、先に触れたように第8章においてその宗派に関する紹介が、また第11章では彼の奇妙な生活ぶりの描写がなされている。つまり「狂気についての脱線」の中に書かれるべき宗教に関する風刺は、一応の本筋である「桶物語」の部で Jack の姿を通じて十全に行なわれているのである。いや、より正確には Jack と Peter の姿を通じてと言うべきであろう。Jack の奇矯な振舞いは、結果として彼の姿を Peter のそれと見分けのつかない程にしている。「二人の乱心と癡癡の根ざす所は同じ」であり、二人は「顔が大変よく似て」いたため「門弟信者でさえしばしば間違える程だった」のである。(199-200) そればかりではない。Jack の空想からでた次の言葉は、風刺の対象となる事柄の性質こそ異なるが、Peter の数々の奇行と類を同じくするものである。

Gentlemen, said he [Jack], I will prove this very Skin of Parchment to be Meat, Drink, and Cloth, to be the Philosopher's Stone, and the Universal Medicine. (190)

一方 Peter は二人の兄弟を前にして、一読して忘れがたい、奇抜という他ない言辭を弄する。この箇所は Peter に関する風刺のなかでも秀逸の部類に属するものである。

Bread, says he, Dear Brothers, is the Staff of Life; in which Bread is contained, inclusivè, the Quintessence of Beef, Mutton, Veal, Venison, Partridge, Plum-pudding, and Custard: And to render all compleat, there is intermingled a due Quantity of

Water, whose Crudities are also corrected by Yeast or Barm, thro' which means it becomes a wholesome fermented Liquor, diffused thro' the Mass of the Bread. (116)

風刺の技法の面から考えると、上に挙げた二人の言葉は、原註およびウォットンの註によれば、非国教徒が Bible に対して持つ“superstitious veneration”と“transubstantiation”の教説とを寓したものである。各宗派の最も顕著な特徴を捉えて、Jack、Peter という人物の、その異常性を拡大、強調した言動によってそれを寓するという手法が共通してみられるのである。宗教一般の教義や信徒の習慣が、風刺家の手にかかると、いかに奇妙で滑稽ものに置き換えられてしまうかを示すこれは好例である。

このように、この作品の二大テーマとして「弁明」で挙げられていた学問風刺と宗教風刺とは、様々な要素をそれぞれに内包しつつ、両者が深く結び合っていることがわかる。「桶物語」の部と「脱線」の部は、両方の内容を相互に参照しつつ把握するものでなければならない。そうでなくては、複雑な構成を特色とするこの作品の全体像は、益々掴みがたいものとなるであろう。

II

作品の後半部分へと進むにつれて明瞭となってくる両者の関連も、前半では簡単に指摘されるものではない。この意味において、依然この作品は難解であるといえる。その難解さの要因として挙げられるもう一つの点は、始めに述べたように、「書き手」の持つ性格によるところが大きい。彼に人格の存在を認め、現実の人物としての性格を想定して、単にスウィフトのペルソナとしてではなくある程度、創造された人物として扱うことの可否を問わないでおくとする、彼がこの作品の書き手であるという設定を受け入れる限りにおいて、書かれたものの内容すなわちこの書物の総体から逆にその書き手を考えるという筋道を我々はとることとなる。この作品のように特殊な風刺においては、真の作者スウィフトに迫るためには、この仮の「作者」を軽視することは出来ないのである。

『桶物語』の書き手に関して Kathleen Williams は次のように述べている。

“Of all Swift’s mouthpieces, the “supposed author” of *A Tale of a Tub* is one of the least tangibel.” 確かに Gulliver と比較しても、両者の現実味、存在感には格段の差が歴然としてある。しかしこれは作品の質の相違を考えて見た場合、何ら驚くに値しないことである。書き手の違いが即ち作品の違いであると言っても良いであろう。『ガリヴァ旅行記』では、主人公兼書き手としてガリヴァは自らの行動の経緯を、回想しながら記していきながら、読者の印象に確固とした人物像を刻むのに対し、『桶物語』の書き手は、自己に言及する回数のわりに、その印象は希薄なまま終始する。したがって、彼は “a fantastic creature, a mere bundle of unrelated qualities” 即ちまとまった人格などを持たぬ風刺の道具であるに過ぎないという指摘も当然である。⁶

しかしながら、彼が如何なる人物であるかは、この作品の各部分を仔細に読むことによって再構成することが可能である。そしてそこから風刺の遂行において彼が果たす役割の一端が明らかになると共に、作者スウィフトがいかにこの書き手の特質を利用しているかが分かるだろう。

彼は様々な横顔を持っているようである。随所で見られる自己に関する直接的な言及からは、彼の色々な特徴が浮かび上がってくる。「緒言」The Preface で彼は表題の由来を説明すると共に、自らがこの書物を執筆することになった経緯を述べている。船乗りは鯨に出会えると桶を投げ与えて鯨の気を紛らわし、船に乱暴するのを防ぐ、ということに「神話的解釈」が加えられた結果、鯨は現代才人が武器を借りて来るホップスの “*Leviathan*”、船はぐらつきがちな “*Commonwealth*” を意味するとされた。そして桶は文字通りに桶であるということとされ、「桶の物語」⁷が書かれることになったというのである。“And my Genius being conceived to lye not unhappily that way, I had the Honor done me to be engaged in the Performance.” (41) 書き手の才能はこうして「教会と国家のお歴々」the *Grandeess of Church and State* (39) のために費やされることとなったというのである。

第1章「序論」Introduction では、彼は、上へよじ登る手段として説教壇、梯子、巡回演壇を取り上げ、宗教家や弁士等を風刺した後、これらが表象するものが、宗教書、詩、娯楽作品であるとした上で、自らの作品は人を喜ば

せ愉しませる作品に属するものであると書く。“It is under this Classis, I have presumed to list my present Treatise, being just come from having the Honor conferred upon me, to be adopted a Member of that Illustrious Fraternity.” (63)「輝かしい団体」とは“the Writers of and for GRUBSTREET”(63)のことであって、彼がどのような種類の物書きであるかがここで示されていることになる。その上彼は、スウィフトの風刺の主たる攻撃対象である、近代派に組する人物であるらしい。「近代の立派な方々の有益な著述を、自己の修養のため国家のために日夜拝読している」(96) 人物でもある。その名も「近代的脱線」A Digression in the Modern Kind と称する章では自らを「世間から近代作家なる栄誉の称号を賜っている我ら」(123) と呼び、その中でも自分は“the freshest Modern”(130) であるといつて憚らない。近代人と近代派は同義ではないが、両者はいずれも‘Moderns’であり、また、近代人であるということを強調する傾向は近代派に特有のものであるだろう。その近代派に属する彼は、宗教、政治を同じ近代才人が攻撃するのを防ぐ便法として拔擢されたという、かなりいかがわしい人物である、とまとめることが出来るだろう。⁸

「桶物語」の宗教風刺の内容は、風刺される側から見ると許しがたい嘲笑、愚弄であっても、Grub street hack が物語るのであれば許されるものであるという議論が成立するとすれば、このような設定のペルソナは、スウィフトに対する非難を和らげる意味合いをも持つ。近代派の才人や学問に対する風刺という点では、書き手をも風刺の対象と同類に属させるというスウィフト独特の手法によって、彼は当時の学界や、個人に対する攻撃を効果的に行なっているのである。書物としての『桶物語』そのものが彼らに対する風刺の道具であると言っても良い。そしてその内容が常軌を逸したものであればあるほど、書き手の異常さは強調され、風刺は辛辣の度を増すのである。

これに加えて、自画自賛の言葉が随所に挿入されることによって一種の喜劇性が生み出されているということも指摘しておきたい。それは本書を形容した言葉に端的に表れている。「現代の学問教養才知の雛型」a Specimen of our Learning, our Politeness and our Wit (36)、あるいは「崇高神秘なる物語」the sublime Mysteries (54) という他にも、‘elaborate’、‘divine’、

‘miraculous’(114, 124, 203)といった形容がされているのである。『桶物語』と『痴愚神礼賛』は、形態や様式など、作品の表層においてはおよそかけ離れたもののように見えるが、喜劇的な精神の横溢する語りの相にみられるように、本書の書き手は、エラスムスの Folly の系譜に直接連なるものであると言える。⁹ その精神は、換言すると、戯作礼賛 *vive la bagatelle* の態度である。スウィフトは作品そのものを「戯作」に仕立て上げるために様々な手段を駆使しているが、中でも中心的な役割を果たしているのが、Folly に相当する書き手なのである。

この者は、スウィフトによって「愚者」たるべく定められているが、文字通り知能の低い人物であるのではない。彼の言は一見非常に知的で、該博である上、論旨の展開が巧みであり、「才人」と呼ぶに相応しい、ブリリアントな印象を読者に与える。次々に言及される古今の哲学上の人名や概念、意味ありげなラテン語の術語や引用句など、後のスウィフトの著作には見られない特徴を本書は持つ。F. R. Leavis が述べている“pre-eminently ‘intellectual satire’”という評は、この作品に特によく当てはまるであろう。¹⁰

但し、書き手が知的であるといっても、その内実はいえ、彼が持つのは偽りの機知 *false wit* とも言うべきものである。この一事に思い至れば、この作品の難解さに対する考え方はおのずと変わってこよう。すなわち表面の難解さの裏には、風刺家スウィフトの存外単純な意図が窺われる場合が少なくないのである。Martin Price はこのことを次のように述べている。“The Tale Teller’s wit lacks order or purpose of its own, but it serves Swift’s own rhetorical ends at every point.”¹¹ スウィフトの風刺の意図に書き手の wit が供される最も顕著な例は、三段論法を模した独特の詭弁のレトリックを用いた箇所に見られる。「序論」の中の、言葉が物体であるという命題を証明した箇所を取り上げてみよう。J. M. Bullitt が指摘しているように、¹²ここは次のような論法になっている。「言葉は weight と gravity を持ち、我々に impression を与える。また、weight と gravity を持ち、impression を与えるものは落下する物体である。従って言葉は落下する物体である。」この三段論法は、weight、gravity、impression には比喩的には profound、serious、a mental impression という意味が有るが、文字通りには、重さ、重み、a physical impression と

いう意味であることを利用して成立させたものであることがわかる。そしてその権威を借りるべく引用されたルクレティウスの“*Corpoream quoque enim vocem constare fatendum est, Et sonitum, quoniam possunt impellere Sensus*”¹³という言葉によって、この論理は正当化されているのである。(60)

しかしながら、この論法自体は前述の‘Spirit’についてと同様、単なる言葉遊びに終始しており、着想としてもありきたりのものである。この箇所が意味を持つのは、続いて述べられる、聴衆が舞台や演壇を取り巻き、口をぽかんとあけて、話される言葉をまるで物体であるかのように口で受け止めているように見えることを揶揄した所の前置きになっているという点においてである。このような姿は、そのまま風神派の信徒たちの姿でもある。彼らは司祭たちの囁気を呑み込むことに「限りなき慰安を感じる」者たちである。(154) 彼らがなぜ囁気を用いるかという理由付けのためにここでも三段論法が用いられている。“*Words are but Wind; and Learning is nothing but Words; ergo, Learning is nothing but Wind.*” (153) 前提のなかに既に誤りを含むこの論理の不合理性は、風神派のもつ概念の不合理性を示すと共に、それをあたかも合理的なものであるかのように述べている書き手の特色をも表わしている。Priceの言葉を借りれば、彼は“the fool who serves the knaves”である。¹⁴ 即ち書き手はスウィフトの単なる代弁者ではなく風刺の対象にもなるという、スウィフトの風刺の常套手段がこの作品に既に表れているということが出来る。作者スウィフトの意図としては、宗教風刺の面では非国教徒を、学問風刺の面では、偽の論理をもっともらしい仕方で操る者たちを一挙に嘲弄するということであり、二大テーマの融合が「書き手」の存在を媒介としてなされているということが指摘されるのである。

III

スウィフトのいかなる風刺作品も、直接的には彼が風刺の主体として筆をとって創作したものであるが、彼の常套手段としてのペルソナ使用という点に着眼し、その特質を考えることが、スウィフトの風刺の本質を探るうえで有効な手段の一つであることは言うまでもない。しかしその点に拘泥してい

ては単なる形式主義に陥る恐れのあることも事実であろう。『桶物語』がクラブ街の才人によって書かれたものであるとの解釈は、スウィフトの作品である本書を考察するための一手段であるにとどまる。以下においては、真の作者スウィフトに焦点を当てて、彼の風刺に対する考え方がどのようにこの作品に表わされているかという点を中心に検討したい。ペルソナ＝仮面は、時には外されて彼の素顔がのぞくこともあるのである。

今まで論じてきたように、この作品は、その複雑な構成、書き手の持つ詭弁の傾向などによって、一見非常に難解であるという印象を読者に与えるものであるが、実際にはそうした難解さは、作者によって意図的に付与されたものであることが推察される。難解さに満ちた書物を世間に与えること、あるいは自己の才能を以て彼の風刺の対象であるような読者に挑戦し彼らを惑わすことが、スウィフトの主たる目的ではなかっただろうか。

We whom the World is pleased to honor with the Title of *Modern Authors*, should never have been able to compass our great Design of an everlasting Remembrance, and never-dying Fame, if our Endeavours had not been so highly serviceable to the general Good of Mankind. This, *O Universe*, is the Adventurous Attempt of me thy Secretary. (123)

このような大言壮語を吐いた書き手は更に、“the Publick Good of Mankind is performed by two Ways, *Instruction*, and *Diversion*” と述べる。(124) つまり彼は「教訓と娯楽」によって「人類の公益」をもたらそうというのである。このような言明が文字どおりのものではないことは、この書き手の役割から考えて明白である。ホラティウス以来繰り返されて来たこの対の概念は、¹⁵しかし、スウィフトの言葉として捉えたとき、複雑な意味を持つことになる。ここで最も単純な考え方をすれば、風刺から得られる利益とは、他人が風刺されて、欠点を暴かれたり、愚行を咎められたりするのを傍観者の立場に立って眺めることに楽しみを見出だし、読者によってはそれを我が身に当てはめることによって教訓へと転化するということであるだろう。「風刺は

本人以外の他人の顔を映す一種の鏡である」*SATYR is a sort of Glass, wherein Beholders do generally discover everybody's Face but their Own.* (215) あるいはまた「風刺は皆に向けられ、誰からも決して怒られない」*Satyr being levelled at all, is never resented for an offence by any.* (51) とはこうした事情を述べた言葉である。しかしながら『桶物語』のように風刺の対象が限定されているものに関しては、例えば『ガリヴァ旅行記』のように、人類の持つ普遍的な悪徳に鋭く迫った作品と事情は異なる。無論『ガリヴァ旅行記』を読んで人類の愚かさを観じて自己を顧みるという読書態度は余りに素朴すぎ、現代にあっては議論の対象にさえなり得なくなっていることであるが、『桶物語』ではこのような捉え方すらなされにくいと言えよう。「娯楽」という点に関して強いて言えば、“*a Discoverer and Collector of Writers Faults*” (95) と定義された「真の批評家」にとっては、本書は、あるいは恰好の素材であるのかも知れない。また、文学作品をあたかも数学的なパズルのように取り扱う批評家にも同様のことが言えよう。但し後者に関しては、本作品が元来持つ特質が、その要因となることを考えれば、非難すべき態度とは断じがたいが。

スウィフトが場合によっては仮面を脱ぐことがあるとはいえ、作品の中の言葉を以て当の作品を読み解くことには自ずと限界がある。それは風刺における作者の意図という問題についても同様に当てはまる。“*The Intelligencer*” の Number III のなかでスウィフトは、人が風刺を書く場合の目的を二つ挙げている。¹⁶ 一つは、“*a publick Spirit, prompting Men of Genius and Virtue, to mend the World as far as they are able*” すなわち「公益」のためであるとし、これを二者の上位に置く。もう一つは“*the private Satisfaction, and Pleasure of the Writer*” である。つまり作者自身の楽しみのために書くという、極めて自然で単純、素朴な態度がこれである。スウィフトが『桶物語』でしていることはまさにこのことであるといえないであらうか。もちろん国教会の牧師として、左右の両派すなわち旧教徒と非国教徒、特に清教徒を Peter と Jack の寓話に託して揶揄、嘲笑し、唯一正常な人物である Martin を結果として正常な者として浮き立たせるという手段で、国教会の側の人々に溜飲を下げさせたり、Wotton や Bentley に代表される近代派の知識人を槍玉に挙

げることを通じて、学界の人々に反省を促すという目的を持って、彼はこの作品を書いたのであるという議論を否定するものではない。だが、宗教については、既成の教義や習慣を風刺したからといって、改革や改善が行なわれるものではない。「桶物語」の部では改革そのもの、あるいは改革の名を借りた逸脱的な行為が風刺の対象になっていることをここで思い出してみるべきである。学問についても、スウィフトは近代派に正面から論争を挑んでいるのではなく、彼らの存在自体を書き手の設定を通じて愚弄しているとさえ思われるのである。Leslie Stephen が述べているように、風刺は本来 negative なものであり、積極的な理想を提示するものではないのである。¹⁷

このように考えてみると、Peter や Jack の言動に見られた「狂気」も、書き手の論理の「不合理」も、ひいては作品全体の構成の複雑さも、その源は、スウィフト自身が風刺という行為そのものに対して持っていた「愉しみ」であつたに違いないと言える。そしてそれは喜劇的な精神によって感得されるものである。J. M. Murry は、この作品を次のように要約している。“*The Tale is, primarily, a manifestation of the comic spirit. Its dominant temper is genial, not savage, exuberant, not destructive. It is a glorious riot of intellectual slapstick.*”¹⁸ 作者スウィフトの comic spirit を我々読者に最も強く感じさせるものの一つに、省略の技法がある。Z — ds、W—tt—on というような単純な短いものも多いが、それよりも、何行にも互って***が並べられたいくつもの箇所の大きな省略が注意を引く。これらの部分の隠された内容は、いかなる読者にも推測がつかない体のものであり、作者だけが知り得るものである。さらに読者を惑わすべく、編集者の註の形で“*Hiatus in MS.*”「原文欠」(62)、“*Hic multa desiderantur.*”「この所欠損多し」(170)、“*Desunt nonnulla.*”「或るものなど欠けたり」(200)、等という断りが添えられているのに加えて、それぞれの箇所には脚注まで付けられている。このように、詮索好きな読者を煙にまく仕掛けが幾重にも施されており、作者はそれを陰で愉しんでいるのである。

省略の手法は、『書物戦争』*The Battle of the Books* でも利用されているが、そこは、読者を惑わすということの他に、ギリシア・ローマの古典の原典にしばしば見られる欠落部を模した形になっている。つまり叙事詩のパロ

ディになっているのである。一方『桶物語』の方は、その欠落箇所は論旨の完結のために不可欠な重要な部分であって、全体のなかの任意の一ヶ所であるという訳ではない。従って読者をはぐらかす効果が意図されていることが、より明白なのである。特にこの作品の中心的な章「狂気についての脱線」での欠損部は秀逸である。書き手は例の蒸気説の展開の過程で、帝国の建設者、学説の展開者、宗教の案出者はいかなる理由で、同一の蒸気によって異なる結果に導かれたかという議論に至る。彼は、「今まで取り扱ったうちで最も深遠なる議論であり、小生の能力を極限まで緊張させねばならぬ。読者も最大の注意を払って聞いてほしい。これからこの問題の解決にとりかかる」との前置きをすることで読者の関心をかきたてて置く。ところが次のパラグラフは、始めの句、“THERE is in Mankind a certain”と最後の結論の文、“And this I take to be a clear Solution of the Matter.”との間に＊が数行にわたって続くのみなのである。(170) 読者は全く要領を得ないまま置き去りにされてしまうのである。しかしこれに不平を述べるようであれば、スウィフトの術中に落ちたことと同断である。原註にあるとおり、「解決に値しない問題」として片付けてしまうような態度は、この作品のような風刺に読者が接し、その真価を味わおうとする場合には必要な条件の一つである。

作品の全体を通じて「狂気」と「理性」とが緋い交ぜになっていたり、「不合理」が「知的」な論理とレトリックの衣を纏っていたりするのであれば、読む側の態度としては、作品を事細かに「切ったり開いたり裂いたり突いたり」(173) して分析した後で、一度は作品を大局的に鳥瞰するような姿勢を取ることも意味のあることではないだろうか。幸福とは「うまく騙されている状態の不断の所有」*a perpetual Possession of being well Deceived* (171) であるという。この言葉に一体いかなる意味が隠されているかは、にわかには判断できない問題であり、また、この言葉をスウィフトは逆説的に述べているのは確かなのであるが、一面の真理を含んでいるように思われる。理性からそれた哲学者の例として挙げられていたうちの一人、エピキュロスと共に「事物の表面から感覚に向かって飛び来る霞や幻で想像を喜ばすことの出来る者、そのような者こそ真に賢明なる者である」(174) という文章などを考えると、書き手の論理の矛盾や不整合を突くなどということにはあまり価

値はないのではないかとと思われる。事物の相対性を認めることを経て、逆説や不合理そのものを認めるような作品の捉え方をする方に意義があるとする考え方が誤りであるとは言えなくなってくる。幸福すなわち上手く騙されている状態は“The Serene Peaceful State of being a Fool among Knaves” (174) であるという。仮に我々読者一人一人が‘fool’だとすれば、‘knaves’は、Jack、Peter、Wottonや、この作品の「書き手」のみならず、作者スウィフト自身であるということになる。

IV

一般的に言って、スウィフトの風刺においては受け取り手である我々読者と彼との間には様々な事情が介在する。例えばスウィフトによって設定された「書き手」は、ある時にはスウィフト自身の考えの代弁者として風刺を行なうが、またある時には風刺の対象として嘲笑的的にされてしまうこともある。風刺の対象は政治・宗教・学問など多岐にわたるが、それらが人間の営為に関わるものである限りにおいて、読者もまた風刺の対象たることから完全に免れるものではない。また作者たるスウィフト自身にも同じことが当てはまる。このことは、後の『ガリヴァ旅行記』に端的に見出だすことの出来る、風刺の普遍性の問題につながっていく事である。しかしながら、『桶物語』のようにある程度風刺の対象が限定された作品においては当然作者が念頭においた読者もまた限定されているであろう。少なくともこの作品の「書き手」程の「知性」なくしてはスウィフトの意図した「難解さ」の持つ意味は半減してしまうに違いない。

この小論で取り上げて論じてきたように、作品の構成や書き手の特質を探ることは、作品論の第一歩であるに過ぎない。しかし、これは特にこの作品のように形式そのものに重要性のあるものにおいては、作品に込められたスウィフトの究極的な意図とも言うべきものに迫るために、不可欠な手段であると考えている。本作品は表面上は難解であるが、スウィフトの意図は彼自身の「愉しみ」であるということも仮の結論に過ぎない。だが、この「愉しみ」なくしては、風刺家にとっても読者にとっても、風刺そのものの意味が損な

われてしまうこともまた事実であろう。表面の難解さは深層において更にその度を増す感が『桶物語』にはある。この作品が正当に評価されるか否かは、その難解さを我々読者が愉しめるかどうかということにかかっている。

註

- 1 テキストは、Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*, eds. A.C.Guthkelch and D.Nichol Smith, 2nd ed.(Oxford: Clarendon Press, 1958)を使用し、引用末尾の数字は頁数を示す。
- 2 Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, ed. G.Birkbeck Hill(Oxford: Clarendon Press, 1905), III, 10, n.6.
- 3 Swift, *A Tale of a Tub*, eds. Angus Ross and David Woolley(Oxford: Oxford Univ. Press, 1986), p. xi.
- 4 Lucretius, *De Rerum Natura*, V, 1.107. 「運命を支配するフォルテュナがそれを我々から遠く向こうへ転じますように。」それとは宇宙の破滅のことである。万物は、その起源である風に再び還元されるという論を受けてこの文が引用されているのである。
- 5 Ricardo Quintana, *The Mind and Art of Jonathan Swift*(London: Oxford Univ. Press, 1936), p. 95.
- 6 Kathleen Williams, *Jonathan Swift and the Age of Compromise*(Lawrence: Univ. of Kansas Press, 1965), p. 132.
- 7 “a tale of a tub”とは元来“idle discourse”あるいは“a gallamaufrey of merriment”という意味で、16、17世紀にしばしば用いられた句である。このことに関しては、Guthkelch and Smith, pp. xxviii ff.参照。
- 8 “the shrewdest Pieces of this Treatise, were conceived in Bed, in a Garret” (44) や “the very Garret I am now writing in” (169) という言葉に見られるように、彼が屋根裏部屋 Garret で執筆したという設定も彼の特徴の一端を示すものである。
- 9 『桶物語』と『痴愚神礼賛』との関わりについては次を参照。John Traugott, “A Tale of a Tub” in *Focus: Swift*, ed. C.J.Rawson(London: Sphere Books, 1971), pp. 95-96.
- 10 F.R.Leavis, *Common Pursuit*(1952; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1976), p. 74.
- 11 Martin Price, *Swift's Rhetorical Art* (1953; rpt. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Univ.Press, 1973), p. 92.

- 12 J.M.Bullitt, *Jonathan Swift and the Anatomy of Satire* (Cambridge: Harverd Univ.Press, 1961), pp. 118-19.
- 13 Lucretius, IV, ll.526-27. 「それゆえ声も言葉も物的なのだと認めなければならない、なぜならそれは感覚器官を打つことが出来るのだから。」
- 14 Price, p. 87.
- 15 Horace, *Ars Poetica*, l. 343.
- 16 Swift, "The Intelligencer No.III," *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis(Oxford: Basil Blackwell, 1955), XII, 34.
- 17 Leslie Stephen, *English Literature and Society in the Eighteenth Century* (London: Duckworth, 1904), pp. 119-120.
- 18 J.M.Murry, *Jonathan Swift: A Critical Biography* (London: Jonathan Cape, 1954), p. 86.